

「やさしい」暮らしを実現する



余合ホーム&モビリティ株式会社



本社、電子棟外観



工場外観

企業概要

代表取締役会長兼社長
余合 繁一氏



所在地 愛知県名古屋市中川区八熊通5-34
TEL:052-352-3331 FAX:052-352-3337
創業 1938年(昭和13年)4月
設立 1962年(昭和37年)7月
資本金 3,000万円
従業員数 110名(系列会社含む)(2024年5月現在)
事業内容 住宅設備用部品、家具用金具、スマートハウス用部品、スマートモビリティ用部品の製造・販売
URL <https://www.yogohm.com>

確かなモノづくりの力と、トヨタ式カイゼンの徹底。住まい(ホーム)と移動空間(モビリティ)を融合させた生活空間の創出をトータルコーディネートするメーカー。

モノの「動き」に関する制御技術が武器

余合ホーム&モビリティ株式会社は、社会に存在する様々なモノの「動き」に関する制御技術を得意とするメーカーである。住宅設備機器部品事業、モビリティ事業、コラボレーション事業の3つで構成されている。

住宅設備機器部品事業は創業から85年を迎え、大手住宅設備機器メーカーをはじめ、有名企業のOEM製品や共同開発製品を数多く世に送り出してきた。ドアヒンジや引き出しレールなど「動きのある金具」やIoTを組み込んだ電子システム製品の企画から製造まで自社一貫体制を強みとしている。

モビリティ事業は、現代表取締役会長兼社長の余合繁一氏の就任を機に発足した。EV開発に関わるデザイン提案を含む車



ヒンジ検査



ヒンジ組立作業

両企画から設計、製作、走行評価・適合に至るまで対応可能とし、様々な研究開発を受託している。

コラボレーション事業では、他社の技術やリソースとの掛け合わせで生み出されるシナジー効果による「革新的な商品作り」を目指している。

飾り金具制作で創業し、住宅設備機器へ

余合繁一社長は三代目にあたる。創業者である祖父・鎮吾氏が1938年、名古屋・大須に家具用金具を主力とした共栄金



スムーブジョイント



スムーブスライダー



スムーブクロザー

ホーム事業においては、メカニクスとエレクトロニクスを融合させ、暮らしの中の動きを便利で快適にする技術を行っている。

「SMOOVE（スムーブ）」という言葉で表し、「もっと滑らかに」「もっとゆっくり」「もっと軽く」「もっと静かに」といった顧客の要望に対し最適な機構設計を行っている。

計デザインの開発責任者を余合社長が務め、メディアに「動くリビングルーム」として取り上げられた。2020年には経済産業省の「地域未来牽引企業」に選出された。

物を設立、1962年に株式会社余合商店に組織変更した。当時は着物を収納する桐箆筒（きりたんす）を婚嫁家具としてあつらえることが一般的で、同社はそこに用いる飾り金具を多く手掛けていた。余合社長は「祖父は金銭やモノに執着せず、自分は借家住まいを続けながら『これまでの恩返し』と言って学校にバックネットを寄付したり、職人志望の若者を育てたりする高い志を持った人だった」とその人柄を偲ぶ。

1964年の東京オリンピックを境に同社に転機が訪れた。オリンピックの観客向けにホテルの建設ラッシュが始まり、水回り住宅設備機器メーカーのOTTOが業界で初めてユニットバスを開発。ここからマンションや戸建住宅へユニットバスが急速に普及していった。当時、二代目である余合環社長はハウスメーカーの勉強会などに積極的に参加しており、そこでOTTOや大手電機メーカーの担当者から「水回りの金具を製造できないか」と相談を受けた。金具は汎用品のカ

ログ販売が一般的であり、専用金具の製造は環氏も経験がなかった。しかし、ライフスタイルの変遷による桐箆筒の需要減少、住宅環境の変化を察知していた環氏は快諾。欧州メーカーの製品を分析し、住宅用金具の研究を始めた。

1981年に余合住金産業株式会社と社名を改め、現在の地に社屋を移した。さらに1985年に環菱工業株式会社（現スマートファクトリー余合株式会社）、2004年には中国・上海に製造工場（上海余合環菱金属製品有限公司）を設立。住宅用金具の生産体制を整え、以降40年にわたり住宅設備機器部品メーカーとして成長を続けてきた。

自動車開発の最先端からの大転換

2008年、現社長の繁一氏のもとに「体調不安を抱えた環社長に代わり、跡を継いで会社を立て直してほしい」と親族から連絡が入った。

繁一氏は幼少より自動車に強

い興味を持ち、速く走るためのラジコンカーのモーター研究に没頭した。探究心はさらに高まり、大学卒業後はトヨタ自動車株式会社に技術者として入社。希望とは異なる部署に配属されたが、その部署では新人でも営業から生産までの一連のクルマづくりを一人で担当することができた。「おかげでプロジェクトの進め方が早くから身につき、経営者育成チームに若くして入ることができた」と余合社長は振り返る。

めきめきと頭角を現した余合社長はハイブリッド車の研究開発に携わった後、高級車・レクサスLS600hプロジェクトの企画開発プロジェクトリーダーに34歳の若さで抜擢される。同時にレクサスGSの企画開発プロジェクトリーダーとして共に切磋琢磨していたのがトヨタ自動車の佐藤恒治社長であり、今でも連絡を取り合う仲だという。

好きな仕事、順風満帆のキャリア、最高の会社員人生を歩んでいた中、大きな選択を迫られた余合社長。「大好きな車のことを考えていられて自分は幸せ



コンセプトカー

会社の要は「エンジニア」

社長就任後、余合社長は様々な経営塾に参加し、経営の本質を学ぼうと努めた。一方、会社を成長させていく仲間である社員にも同じ意識を持ってもらいたいと、社員一人ひとりと会社の将来について徹底的に話し合った。同社の事業の核は技術力であることから、エンジニアの育成に力を注いでいる。ただし、専門技術さえ身に付ければよいのではなく、「広い視野で全体を見ることが必要」と余合社長は話す。月1

回、全社員で行う「改善活動」では、部署を横断してテーマ毎に編成した班を作り、異なる立場から改善案を話し合うことを大切にしている。また、ISO（品質マネジメントシステム）の社内担当者毎年入れ替え、品質向上について深く考える機会を全員に与えている。

日本のスマートホームを世界へ

「日本の住宅は高品質であるのに海外輸出がほぼされていない」と余合社長。今後は海外への住宅輸出に注目している。少子化により日本の住宅市場縮小が予想される一方、中国・アジアにおける住宅需要が増加することを見据え、生産拠点として中国・アジアを捉えている。実際に上海工場の売上の3分の2が中国・アジアでの販売である。

「これまでの15年はエンジニア育成に注力し、会社の足を固めてきた。今後は『スマートホーム、スマートモビリティ』システムを海外展開し、就任30年目を迎

だったが、やることをやり切ったという思いもあり、今度は家業を継ぎ、守り、また次の世代に繋げたいと思った」と話す。

家業を継いだのはリーマンショック直後の2009年。減少傾向にあった売上はさらに落ち込み、大きな赤字を抱えた状態での社長就任だった。会社の状況を見直すも無駄なコストや非効率業務が多くあることに気づく。そこで、トヨタ自動車時代に叩き込まれた業務改善手法を実施し、1年で会社の黒字化に成功した。

住まいとモビリティが融合する時代

2011年、社名を「余合ホーム&モビリティ株式会社」と変更。「自動運転の車は快適な動く居住空間となり、排ガスを出不さない乗り物は住宅空間の中に入っている。住まいとモビリティ（乗り物）が融合する時代が来る」という余合社長の未来予想を表した社名となっている。

実際、同社では次世代自動車の開発を各自動車メーカーから受託し、あるプロジェクトでは設

えたい」と余合社長は語る。

祖父から伯父、そして自身へと引継ぎ、紡いできた会社の歴史。15年後の創業100年を目指し、これからも進化し続ける。

編集 会員事業部 中嶋 理可

支店より一言

先駆的なアイデアを通じてより良い生活空間を創出する同社の最大の強みは、社員全員が自社の価値向上に向けて主体的に取り組むことができる組織力にあると考えます。社長就任から全社員で築き上げてきた技術力を、これからは海外にも提供していくことを目指されています。100年企業へ向け、新たな挑戦を惜しまない組織力には、益々の成長を予感させます。



百五銀行 八田支店長
かみ だ 上田 茂則